調査報告

鬼師の世界

——黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(2)——

The World of Ogre-tile Makers

—"Kuroji" as Fired Tiles: the Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro Line (2)—

高原　隆

TAKAHARA Takashi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail:ttakashi@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

In this article I focused on the Iwatsuki Sentaro line. Focusing on the line, especially upon Iwatsuki Sentaro himself, the state of the origin of the Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro line will become explicit. Though I could not get the details of the story of Iwatsuki Sentaro who worked as an ogre-tile maker when he was in Enshu, it is a fact that Sentaro was what is called, "Bankumono" who was an artisan traveling here and there. Through traveling various regions as an artisan of ogre-tiles particularly in the region of Enshu, Sentaro developed his artisanship. It is not certain when he departed for Enshu for the purpose of becoming an ogre-tile maker. However, it is certain that when he was almost in the middle of his teens, he left Takahama which was his hometown. Sentaro stayed in the area of Enshu up to when he became 45 years old. Then he went back to Takahama. At that time he was a great master of ogre-tiles. Sentaro started on a new workshop of ogre-tiles in Takahama. It was the year of 1912.

The story of the foundation of the Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro line in Takahama is not enough to inform us about what Sentaro had done in the region of Enshu. However, as contrasted with that of the Yamamoto Kichibei line, the Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro has a richer story which tells us how a new ogre-tile makers' line originated. Furthermore, the Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro line has most succeeded to flourished among other groups in Sanshu. On the other hand the other large group the Yamamoto Kichibei line does not have a story of the origin of the line. In this sense the story of Iwatsuki Sentaro and that of the Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro line is important and unique.

神谷春義を直接の元祖とする三州における鬼板屋群と文字通り兄弟のような関係にある鬼板屋群が岩月仙太郎を元祖とするグループである。神谷春義系と岩月仙太郎系は余りにも近

いが故に，差異化して違いを前景化させながら逆に相互に反発し合うところがあるのは否定できない。その様は現代における一種の神話のような物語を紡いでおり，事実，三州に独自の流派を形成して来ている。

この二つのグループの「近さ」であるが，何といっても両派の元祖がまず赤の他人ではないことが重要である。ただ単に鬼瓦の技術や流儀を一つにするだけでなく，血縁においても色濃く繋がっており，神谷春義と岩月仙太郎は甥と叔父の関係にある。仙太郎の姉の子の一人が春義なのである。仙太郎は鬼板師として遠州で晩苦者（ばんくもの）のような生活をしながら技術を磨いていた。そこへ甥の春義がおそらく春義の母の紹介を通して弟子入りして来たのである。それ故に神谷春義系と岩月仙太郎系は同根同形であり，大きくは一つのグループを成す鬼板屋群なのである。また「三州」という枠組みを外せばこのグループの元祖は二人ではなく一人になり，岩月仙太郎がその人となる。ここでは岩月仙太郎とそのグループについて焦点を絞り，その特徴を描写する。

［II］岩月仙太郎系――鬼仙（岩月鬼瓦，三州鬼仙），鬼作，（石英）

岩月仙太郎の系列は直接には，2003年9月現在で4社になっている。系列の母体であった鬼仙は1999年9月6日に自己破産し，存在していない。石英は白地組合に属している関係上，ここでは取り上げない。よって，旧鬼仙と岩月鬼瓦，三州鬼仙，鬼作を対象とし，岩月仙太郎系について考察してみたい。

鬼仙

鬼源・鬼仙系の鬼板屋の発端になった人物が岩月仙太郎である。慶応3年（1867）に現在の高浜市に当たる碧海郡高浜町に生まれている。女5人男1人の末っ子である。父親はすでになく，女親と姉に育てられたという。後に鬼仙を興す仙太郎が生まれた家は父の長十（ちょうじゅう）が百姓をやりながら，色々な仕事を現在のアルバイトのような形で手掛けていたらしい。五代目鬼仙に当たる岩月清は長十について次のように言っている。

> 土器屋っていうか，ああいうお釜作ったり。それから船乗り。あの，何て言うだね，船頭。海が近いから，結局三河の特産を，ちょっとした船で，あっちの伊勢の方へ持ってったり，また伊勢の特産品を持って来たりしている，そういう。

仙太郎は少し大きくなると直ぐ働き始め，家計を助けなくてはならない情況に家はあったようである。

昔でいう，寺子屋か小学校行ったかどうか分かりませんけど，働かな食っていかん，いけん時代だもんで。あの，何て言うですか，どうせ，今で言う小学校4年生か5年生ぐらいで，もう働いたじゃないかね。そいで，魚の引き売りをやって，大浜とか，新川の方で安い魚を仕入れて，海のない刈谷から向こうの知立だとか，豊田の。豊田といってもそんな遠くじゃなくても，知立からちょっといきゃ。うん，そういう所へ，もう競うようにして，大八車とかそういう車に積んで，安っぽい魚を売りに歩いて。うちのお婆さんが教えてくれたけど，「お爺さん（仙太郎）は何て言うだね，ションベン，立ち小便もしたことがない」と。「歩き，走り小便だ」と。「小便しとると魚が腐っちゃうから，車を引きながら，小便を，回りながら走った」っていうぐらい。

ところが，仙太郎は魚屋をしている時に，鬼板屋（おそらく山本吉兵衛系の鬼屋）の仕事に興味を覚え，利益の上がらない魚屋に見切りを付け，鬼板師になる決心をしたのである。仙太郎は理由は定かでないが，三河で小僧から鬼板の修行をせずに，遠州へ出掛けて旅職人をしながら鬼板の技術を習得している。清がその辺りの事情を話してくれた。

結局，三河の鬼屋さんに弟子入りするよりも，向こうへ，遠州の方へ行った方が良いわっていう風で，魚屋ほかっといて，引き売りやめて，瓦職人ね。ほで，親方誰もいない，一匹狼で，見よう見真似で。結局，何ていうだね，一月二月瓦屋さんに逗留しては，そこで飯食わせて貰って，なにがしかの賃金貰って，また居心地が悪うなった，良くなった風で，クルクルやった。寒い時はぬくたい遠州路を，で仕事しとって，暑くなってくると富士川を沿って身延山のずぅっとあっちはものすごう瓦屋さんが多いとこなの。今から20年くらい前までは，何て言うですか，公害がやかましくなる迄は，どこの村行っても瓦屋さんがあったの。そのぐらいあったから，確かな，ある程度の腕を持っておれば，いくらでも雇って貰えて。

仙太郎は旅職人をしながら何と45歳まで静岡県から長野県辺りを季節に応じて転々として，腕を磨きながら生活していたのである。しかし，仙太郎は「儲けた金は全部博打でいかれて」と清が言っているように賭事の好きな鬼板師だったらしい。旅職人の通称である「晩苦者」（ばんくもの）のイメージにピッタリ当てはまる鬼板師である。（第1図参照）

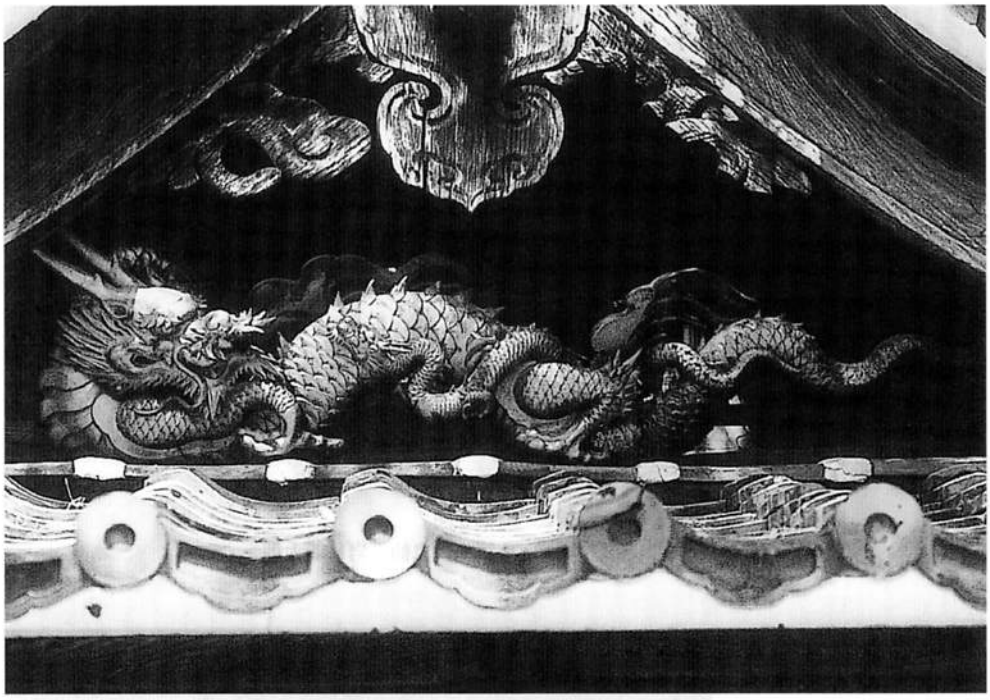
ここに鬼仙と鬼源が交差し，鬼板屋の源を一つにする話がある。仙太郎は男1人，女5人の6人兄弟だったが，その中の1人の姉が「神谷」という高浜の回船問屋へ嫁に行っている。その仙太郎の姉が産んだ子が，「神谷春義」（鬼源），「神谷栄吉」（上鬼栄），「神谷長之助」（鬼長）だった。長男の神谷春義は明治11年（1878）生まれであり，仙太郎から見ると，甥に当

第1図
初代鬼仙　岩月仙太郎

たり，およそ11歳離れている。この春義が母親の弟，仙太郎を頼って遠州へ行き，一緒に旅職人をしながら仙太郎から鬼板の技術を習得するのである。仙太郎は住まいを遠州の島田へ持っていたので，結果，高浜へ帰るのは明治45年（1912）になった。一方の春義は数年早く高浜へ帰り，『鬼源』を始めたのである。少し遅れて高浜へ戻った仙太郎は『鬼仙』を興すことになる。ここに，親方と弟子が高浜では立場が逆転し，春義が鬼板屋を最初に興して遠州の新しい鬼板の流儀を高浜へ伝え，後から仙太郎が同じ系統の鬼板屋を始めたので，事情を知らない人は春義と仙太郎の関係を逆さに捉えてしまう事態が生じたのである。

以上のように「鬼仙」と「鬼源」はルーツに関して，鬼板屋としてのみならず，血縁関係に於いても同根なのである。さらにその鬼源へ春義の弟の栄吉と長之助が小僧として入り，後に「上鬼栄」と「鬼長」になって独立している。それ故，鬼源・鬼仙系は簡潔に『鬼仙系』といっても間違いではない。（第2図参照）

初代鬼仙の仙太郎は昭和15年（1940）に75歳で亡くなった。二代目鬼仙には岩月新太郎がなっている。新太郎は明治28年（1895）生まれである。昭和18年（1943）に亡くなっている。仙太郎と新太郎は亡くなった年が僅かに3年しか違わない。この事から推測できることは，仙太郎と新太郎は親方と職人の関係でずっと来たということである。新太郎は仙太郎が28歳の頃の子であり，仙太郎が45歳で高浜に戻るまでの17年間は遠州の時代である。新太郎が本格的に鬼板師の仕事を始めたのは，仙太郎が高浜に鬼仙を興してからのことだと思われる。岩月清が昭和13年生まれであり，父，新太郎の死は清が4歳半ぐらいの時に当たり，清



第2図　龍　岩月仙太郎作
若宮神社，高浜市大山公園内

自身，ほとんど父を覚えていない状態である。それ故，新太郎の話は残念ながら余り語られていない。

> 新太郎さんはね，ほいだけど，良い，すごいいい，おとっつあんだもンね。
> しょっちゅう，おっかさんがほう言ってた。おとっつぁん，集金に行くと，履いてったステテコや，すごいお洒落で，すごいカンカン帽子被って，すごい，今でいうと，夏でいうと，紹の着物来て兵児帯で，49歳ですごいお洒落して，ほいで二日も三日も，自動車ないじゃん，電車で集金に行くでね。ほいと，必ずステテコや色々なもんを，何ていうだん，「ウンコちびったで捨てて来た」とか言って，置いて来ちゃっとるってって。(第3図及び第4図参照)

新太郎には女6人男4人の子供があり，男4人が全員鬼板師になっている。三代目を継いだのはまず長男の悦二であった。悦二は大正11年（1922）に生まれている。ところが昭和23年（1948）に肺病で亡くなっている。26歳であった。旧制刈谷中学校を出た秀才だったという。清が兄について語っている。

第3図
第二代鬼仙　岩月新太郎

第4図
猫飾り瓦　岩月新太郎作

「頭ええわ」って，誰が言っても言うもん。昔，刈中行くの少ないでしょ。「悦っちゃんは利口だった，どうのこうの」って言って。「悦っちゃんが生きてりゃどうのこうの。」うちの女房でもみんなが，「兄さんが生きとったら，お父さん（清）なんかこの世にゃおうへんわなあ」って。おらん代わりに兄貴が儲けてさあ。おらぁ，楽なサラリーマンか学校の先生かなんかにさしてくれとったわいってって。

悦二は頭が良かったので学校から帰ると経理を手伝っていたらしい。ただ本格的に鬼板師の仕事に就くのは刈中を卒業した17歳頃だと思われる。清は次のように言っている。

中学行って帰ってくると必ず，大福帳広げて，兄貴は「今日の売上げはどうのこうの」って。商売やるだっただら。「ほんなん中学校へ，中学校行く必要ねえなあ」ってって。「小学校6年で良かったなあ」って言うぐらい。

悦二は旧制中学校を卒業して暫くは仙太郎と新太郎と一緒に仕事場で働いていたと思われる。しかし，この三人が次々と亡くなっていったのであった。（仙太郎1940年，新太郎1943年，悦二1948年，それぞれ死亡）

悦二の跡を継いだのは次男の幸一であった。昭和2年（1927）生まれである。悦二が亡くなってからは鬼仙を盛り立てて行くはずであった。しかし，幸一は昭和39年に鬼仙を破綻させ出て行っている。

次男が，あの，戦後，鬼仙を継いでやってたけど，博打は嫌いだけど女が好きだもんで，全財産，全部，花に注ぎ込んじゃって万歳になって。

だからみんなのうなっちゃうね。うん。お爺さんが儲けてくれたお金を全部売り払って，のうしてしまっただね。今何て言うですか，そこの鬼作さんの辺ね。あそこから駅の辺ずうっと何千坪というのが僕らの子供の頃の……

幸一は今は身請けした女性と一緒に岐阜で暮らしているとのことである。幸一は結果，悦二の後，約十五年ほど，鬼仙として働いたことになる。清の言葉は直截的である。

下の幸一って弟が商売やっとたけど，それも，パンパン屋や道楽して，パンパンの女を嫁さんに貰ったりして，ろくな事してやへんから，だんだん，だんだん谷底へ転げ落ちるようになっとる。

幸一の次ぎに三男の光男がいる。光男は昭和6年（1931）生まれで当時既に幸一と一緒に鬼仙で鬼瓦を製作していた。幸一が昭和39年に鬼仙を出て行くことになった時，光男に五代目鬼仙の話が当然の事ながら行ったという。しかし，光男は「性格的に商売をするのが嫌い」と言って断り，「鬼瓦の修行をする」と言って叔父に当たる杉浦作次郎の鬼作へ職人として移っている。結果，五代目鬼仙となったのは，岩月清であった。清は岩月新太郎の四男で，昭和13年（1938）に生まれている。刈谷高校を卒業すると，鬼仙へは入らずに岡崎信用金庫に勤めている。しかし3年間で銀行員をやめて，鬼仙へ入ることになる。その辺りの出来事を清は次のように語っている。

子供が「公金横領で首になったじゃないか」と言いますが，生意気な先輩と喧嘩をして辞めました。一年ほどブラブラ，昼間は競馬，夜は名古屋の町で遊んでおりまして，こんな事じゃいかんと思って，家業の鬼屋を手伝い，兄貴と一緒にやっておりましたら，事情があって，昭和39年より僕が経営者として続いております。

実質上，鬼板師として修行したことのない清は職人になる道を選ばずに，鬼仙の経営者になる選択をする。外交，渉外，営業といった仕事である。これに鬼屋としての雑用が入ってくる。鬼瓦の窯炊き，窯積み，窯出し，そして得意先へ鬼瓦を運搬する仕事である。高速道路が整備され，車で遠隔地へ運ぶことが可能になり販路が広がったことが営業的に助かった要因だという。手造りの技術を持たない清を助けたのは「仙太郎」であった。仙太郎の弟子であり職人であった人が鬼仙を支えたのであった。矢野静夫と石川与三郎の２人が中心メンバーで，２人は仙太郎の直弟子である。矢野は鬼仙の職人になり，石川は半田市に工房を自ら持ち，製品を搬入することで清を助けたのである。ここに，悦二以降，途絶えかけた鬼仙の技術が職人を通して清の鬼仙に復活するのである。さらに神谷正司，佐々木徳四郎，小林留夫，杉浦福吉，山本定子と言った職人が鬼仙に入り，堂宮関係を中心に手造りの鬼瓦を生産する体制を組織することになったのである。さらに鬼作へ出て行った兄の光男が10年ほどして鬼仙へ戻り，手造りの主力メンバーの１人に加わっている。鬼仙が危機に直面したときに，仙太郎が残した伝統が人を動かしたと言って良いだろう。

清は営業に徹しながら，鬼仙の伝統である手造り鬼瓦を鬼仙の仕事の核に据えたのである。清は営業を広げることにも努力している。プレスの鬼瓦が出始めた頃に積極的にプレス鬼の生産を他社に奨め，鬼仙自らプレスの白地や黒地を購入し，鬼仙の窯で焼成し，販売していっている。それ故，他の鬼板屋との関係上，外部から鬼仙を見るとプレス中心の鬼板屋に見えたところがあったのかもしれない。何故なら清自身が親方として手造りの鬼瓦を作らなかったからである。

平成15年７月28日に訪れた時には鬼仙は無くなっていた。前回，清にインタビューに行ったのは平成11年８月26日であった。鬼仙はその11日後に自己破産をしたのである。資産は競売にかけられ，名義が清の姉になった。鬼仙の看板はすでにない。ただ以前とほとんど変わっていない。清自身は悪びれるわけでもなく，むしろサッパリした感じだった。自己破産になり資産は無くなっているが，同時に膨大な借金も無くなったからである。

鬼仙が倒産したことにより，鬼仙という鬼板屋は清の代で平成11年９月６日に無くなったことになる。現在，工場も家屋もそのまま残っているが，清のものではない。ところが平成11年に訪れたとき以上に活気があるのである。清は鬼仙を潰したのは事実である。しかし，清に２人の息子があり，それぞれが別々の会社を興し，新しい鬼板屋が二つ誕生したのであった。長男の岩月秀之が「岩月鬼瓦」をつくり，神明町で鬼瓦を生産している。弟の貴は鬼仙

のあった工場で「三州鬼仙」として鬼瓦を作っている。それ故，表面上は何も変わっていないように見えるのである。むしろ以前よりも雰囲気が明るくなっている。実際最初に訪れたのは倒産する直前だったので，なおさら，現在との落差に驚いてしまうのかもしれない。

鬼板屋自体が倒産を機に世代交代したのが大きな変化である。もう一つの大きな変化は清本人である。清は倒産以前は経営者に徹して，自ら職人として鬼瓦を作ることはしなかったと言っている。他の鬼瓦屋の人々も「清は鬼は作れない人間だ」といった評価が暗黙のうちにあったし，現在も同じであるのかもしれない。しかし，清は倒産以来，手造りの鬼板師として息子の貴と一緒に旧鬼仙の工場で鬼瓦を作っている。中でもユニークなのが，清の作る鬼面である。熟練した鬼板師の作る左右対称な鬼面と違い，明らかにどことなく，ずれているのであるが，独特の味わいを持っている実に人間くさい鬼面である。職人は他の職人の技を見て覚えるという。清は「35年間，鬼仙で職人の技を見て覚え，同時に屋根工事屋さんとの直接取引で，数々の指摘を受け，手造りが出来るようになったのだ」と言っている。清の次の言葉からも清が手造りをすることがはっきりと分かる。ある瓦屋さんが工場に来て清の鬼を見た時の話である。(第5図参照)

「これは誰がつくっとる」「大将が作る」っとこう言って。あの，案内して来る瓦屋の親父等が。そう言うわねえ。うん，ほいで，「感激した」ってって帰って行くの。

それこそ，この間も，地震あった宮城県の方の工務店のやつが来て，「あっ，ほんと，親父さん，作ってくれるかー」ってったら，「あー，作ってあげるよ」って言うの。「うん，だけど二度と同じ顔のものは作らんよ」ってって言ってやるの。俺が作ると，その日の気分で，鬼の顔が違ってくるだねー。(笑い)

第5図
第五代鬼仙　岩月清

この時，一緒に岩月貴も話しに加わっており，直ぐに相槌を打っている。貴は同じ仕事場で鬼瓦を作っているから貴の言葉は傾聴に値する。

確かに，確かに。

清はこの後に続けて補足している。

ある時は，顔がこうしといたり，極端な言い方，こうなったり，こうなったりして作っとん。それが良いだげなあ。

たまたま，鬼仙に用事があって立ち寄った時に，清からまだ白地の状態で仕事場の横にズラリと並んでいる清の鬼面を見せて貰ったことがある。清が話している通り，それぞれの鬼面の表情が，丁度，「五百羅漢」のように違うのであった。（第6図参照）

第6図　本鬼面一文字（白地）
岩月清作

清には秀之と貴の２人の息子がいる。現在は秀之が岩月鬼瓦を，貴が三州鬼仙を持ち，手造りの鬼瓦を生産している。まず，父親の清と同じ工場で働いている貴の方から紹介する。本来なら，兄秀之が六代目鬼仙を継ぎ，貴は職人の道に入るはずであったが，鬼仙が倒産したために，鬼仙が解体したので，そこから新たに二つの鬼板屋が生まれたのである。

貴は昭和46年（1971）に生まれている。現在32歳である。父親の清と貴を交えて話を聞いたのである。鬼板屋に育った貴は子供の頃の話をしてくれた。

> あー，職人さんの横で見真似で，何て言うの，紋を作ったり，遊び程度で粘土遊びはやってたっていうのはあるかな。

> 野球をやってて，まあスパルタ教育って言うか，まあ結構，練習って言うか，やってた。リトルリーグで。

家では仕事の手伝いをしたことが時々あるのかと尋ねてみると，「全然ない」と答えている。高校まで何も家の仕事はやったことが無く，高校を卒業してから，貴は初めて家の仕事に係わっている。

> 高校を出て，まあ，窯の手伝いとか，やり始めて。あと，配達とか。あと，それ以外は粘土も触ってなかったし。大学行ってないけど，21，21，20歳過ぎからかなー，本格的っていうか，その叔父さん（岩月光男）に一応，聞いて，見よう見真似でやったのは，20歳過ぎかなあ。

貴が手造りの鬼瓦を始めた動機について次のように言っている。

> きっかけとかはないんだけど，まあ，将来に不安を感じたっていうか。そのー，何か覚えとけば，まあ，良いかなーっていうぐらいで。

その頃（1981年），鬼仙には叔父の光男と山本定子の２人が職人として働いていたという。その仕事場で，貴は鬼瓦の修行に入ったのである。

> 最初からいきなり，まあ，大きいもんっていうのか。二尺くらいのもん。お寺では一般的なもの。それからいきなり入って。

> まあ，その時，良くお寺の仕事があってそれが売れ筋っていうか，まあ，在庫じゃない

けど，そういうの作っておけば良いかなーってことで。とにかく，大きいもんから入ったっていうのが。

貴は叔父の光男の働く手造り鬼の仕事場で一緒に仕事をするようになった。ところが，貴は興味深いことを述べている。

ある程度ね，小さい時からさぁ，その作りっていうのは見てたから，こうやってやればっていうのは分かってたもんで，うーん，自然に最初入っていけれて。そういう感じで，全然初めてじゃあ。昔，小さい頃，見てたから，仕事はそんなに難しく感じなかった。

貴は本人自ら言っているように，高校を卒業するまで仕事を手伝っていない。しかし，「初めてとは少しも感じることなく，仕事が出来た」というのである。貴のこの言葉はどこか，清の言葉と響き合うところがある。清も，35年間，鬼仙の経営一筋で，一切，鬼瓦は作ったことは無いと言っている。ところが，鬼仙が無くなってから初めて，鬼瓦を作り出しているのである。その時も，やはり，作れる理由は，「長い間，職人の手造りの仕事を見ていたから」と言っている。「職人は見て覚える」もので，習うものでも，教えて出来るようになるものでもない事は，色々な機会に耳にした言葉である。貴や清の言っている事は一般の素人から考えると何か，ピンと来ないものを感じるのであるが，「見る」事により，何かが刷り込まれるのは確かである。

光男と如何に仕事をして，自らの糧にしていたかを貴は思い出しながら語っている。

「教えてくれ」っていうのは言わんかったんで。ほんとに，その基本的なー，何だろ，所だけを教わって……

うん，それで，マンツーマンで教えて貰ったっていうじゃない。向こうが仕事が空いた時，ふと立ち寄って，「叔父さん，ここどうしたらいいー」っとか言うような感じで。

まあ，隣でやってたから。

見て。

21から25ぐらいまでは，まあほとんど同じ物を作ってたーっていう。その，二尺の経の巻っていうのを，毎日，毎年っていうか，その，ずうっと，同じ物を作ってばかり。あと，まあ，大きくなったり，小さくなったりっていうのは有るんだけど。

あと，型起こしとかもやったこと無かったし。その，同じ繰り返しっていうか。

「図面から作ってたのですか」と尋ねると，

そう，図面から作ってたってこと。4年間，まあ，同じものの繰り返しで。

仕事自体は今もほとんど変わって居らず，貴はサイズは別にして，経の巻を作り続けて来ているという。大きな変化は貴にとっては，叔父の光男が鬼仙を去って行ったことだという。

うん，その時は，どうなっちゃうのかなーっていうのはあったね。矢っ張り，うん，その時はちょっと不安になったね。これから1人で，あれ，やっていけるのかなーっていうのは思った。

側にいた清が「お父さんがやれん?!　と思った」と言うと，

うん，そうだね。うちの親父じゃあ，出来るかなあ，作れるのかなーって，不安を感じてたねえ。

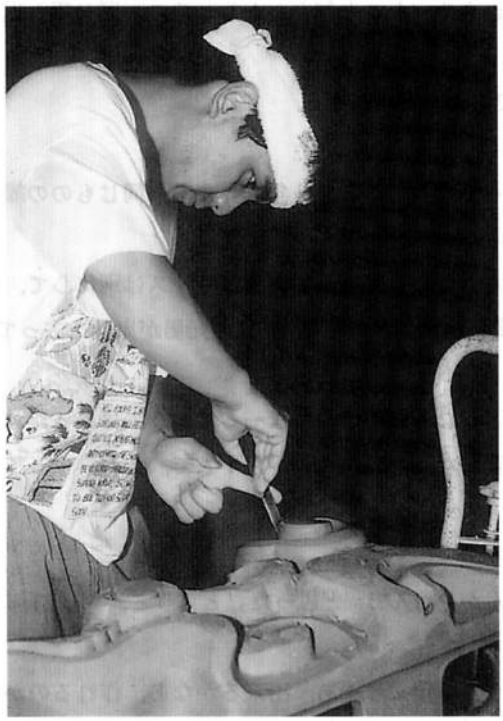
この貴の言葉からも分かるように他の鬼板屋だけが「清は手造りの鬼瓦が出来ない」と思っていただけではなく，実の息子さえも同じ考えをしていたわけである。つまり，清は本人の言葉通り，倒産するまで鬼は作ったことがなかったのである。

光男は平成10年6月に，鬼仙からの給与の滞りを理由に鬼長へ，息子の実と共に出て行き，鬼仙はそれからほぼ1年3ヶ月後に倒産したのである。貴は当然の事ながら，不安だったという。しかし，倒産は同時に新しい変化をもたらした。貴は次のように言っている。(第7図参照)

まあ，叔父さんが居なくなって，会社潰れたわねえ。9月に。その時はどうなるかなーっと思ったけど……

仕事がねえ，一応，同じ場所でやれたし。まあ，その，鬼面とか，まあ，僕はあんまり作ったこと無いんだけど。鬼面の注文とか来るようになって。これはやったこと無いで，どうなるかなあ，作れるのかなあ。

ほんとき，まあ親父も，もう，そういう工場へ入るようになって，何か，鬼面を作る，



第7図
初代三州鬼仙　岩月貴

作ってたんだよねー，親父が……

出来るかなーって思ってたら，いや，それが出来たもんでー。あ，これは，ちょっとー。あの，何，気持ち的に余裕が出来て。

何て言うんだろなあ。叔父さんが作ってた鬼面じゃない。何か，なんてーだろうなあ。自分見て，叔父さんの鬼面よりは面白いっていうか，何て言うんだろうなあ。

親父の作った鬼面はなんか，面白いっていうのか，何て言うのかなあ。ユニークというか。

叔父さんのは綺麗で，確かに上手いけど，何か，冷めとるじゃないけど，屋根載ってどうかなーっていうのがあるかなあ。

親父の作ったやつは，屋根載って，あー，生きて来るかなあっていう。

それが，うーん，ビックリしたかなあ。

清の作る鬼面が貴の心の中の不安を吹き飛ばしてしまったことが分かる。貴は「鬼瓦っていうのは何だと思う」という問いかけに対して，次のように答えている。

> うーん，矢っ張り，屋根に載って生きて来る，それが一番良い鬼じゃないかなあ。ま，とにかく，勢いのある鬼が作れるようになるには，言葉じゃ言い表せないんだけど，「オーーッ」て来るもんがあるんだよねえ。見た感じ。載せた時に。

確かに多大な負債を抱えて自己破産した鬼仙ではあるが，新しい力が息吹いているのは否定できない。これが伝統の力というものなのかも知れない。

貴の兄が岩月秀之である。昭和42年（1967）に鬼仙の長男として生まれている。インタビューは岩月鬼瓦のある神明町の事務所で行った。訪ねていった時は龍の復元の作業中であり，暫くは写真を撮ることに切り替え，復元の区切りがつくまで待った。仕事場では秀之を入れて3人が働いていた。奥さんの久美と女性のパート1人である。男は秀之1人である。女性が2人職人として働いているせいか妙に華やかな感じのする仕事場であった。

秀之は仕事を中断するとインタビューに応じてくれた。まず小さい頃の思い出を語ってもらった。

> 小さい頃は，昔は，瓦屋，鬼瓦屋なんで，達磨窯がまだあった時代なんですけど。達磨窯で，まだ，鬼瓦焼いてた時代で，達磨窯の上に立って遊んだり。土場があったもんですから，土場に雨が降った後は水が溜まるもんですから，水の中で泥まみれになって遊んでいた覚えがありますが……

秀之は中京大学商学部経営学科を卒業している。大学を卒業するまで家の手伝いはしたことがないと言っている。

> 手伝った覚えは，まあ，その，手伝うというと何か，こう，お小遣い貰えるから，とか，そういうのだと思うんですが，そういうのは無かったですね。自分の場合は，何か，見てるだけが多かったですねえ。職場の中を走り回って遊んでた方ですね。遊びに夢中だったですねえ。

「親から手伝えとか無かったですか」と聞くと，

> いや，全然無かったですねえ。大学時代も喫茶店でバイトしてて，殆ど大学にも行って

ないような状態で，朝帰って来て，寝て，また，夜，喫茶店のバイトに行くくらいだったんですからねえ。

「何故，大学を卒業してすぐ鬼仙へ入られたのですか」と尋ねてみた。

自分ちが鬼瓦屋だったからっていうだけですね，理由は。何も考えずに鬼瓦屋をやって，継いでしまったっていう感じですね。

秀之は22歳の頃は何故，鬼瓦を始めたのか，本人自身はっきり分かっていなかったと言っている。何も考えずに自然に家の中に入っていた感じなのである。

秀之は大学を卒業する22歳まで鬼瓦を作ったことは一度もない。その秀之がやはり，弟の貴と全く同じような事を話すのであった。もちろん，秀之と貴の間にはインタビューについての打ち合わせも何も無かったはずであるし，別々の場所で違う時間にインタビューしているにも係わらず，２人は全く同じような事を語るのである。

22で入って，もう，あれですね，見よう見真似でしたね。最初は。簡単なものから起こしていく，作っていくっていうのは小さい頃から見てるもんですから，手は勝手に動きますね。やはり。

見てるから，もう，手と，やり方だけ，一瞬だけ教えていただいて。まあ，小さい頃から見てるっていうのが大きいんじゃないですかねえ。自然に，もう，やること自体，遊んでるところが，もう，職場ですから，昔から居た職人さんの見てるから，へらの持ち方も苦にならないし，磨くっていう事も，小さい頃から手伝ってるっていうあれは無いんだけど，へらを持って遊んでた事もあるだろうし。

うーん，もう，ですね，何の違和感もなく，直ぐ出来ましたねえ。

「門前の小僧習わぬ経を読む」の言葉通り，貴だけでなく，兄の秀之も同様な事が起こっている。そしてこの事はそっくりそのまま清の現在へと繋がってくるのである。

だから，そう，小さい頃からずーっと見てるから，もう，直ぐ覚わるって感じですかねえ。

秀之はさらにこう付け加えている。

一つ基本さえ覚えれば，この仕事できていく仕事なんで。後は自分のどうやって工夫するかですからねえ。

秀之も貴と同様，叔父の光男は直接の師である。教え方は鬼板師独特のものがあるようである。

教えてくれないんでー，職人なんで。自分も聞くのもあれだったんで。

ウーン，殆ど教えて……ただ一瞬だけ教えていただく。

秀之の場合は別の作業場で働いていたという。

叔父さんにしてみたら，もっと聞いてほしかったのかなーっと思うんですけど……(ちょっとコメントとかは）それは有りましたねー。「ここはどうやってやるのー」とか言うのは聞いてましたねー。つきっきりじゃなくて，ただ其処まで作っていって分からないところは，ここはどうやったらいいだろうかっていうのは聞いてましたね。そしたら，「こうしてやったらいいんじゃないか」っていう風で……

けど，同じ事は二度と聞かんかったような記憶はありますけどねえ。

秀之は平成5年（1995）に卒業して，鬼仙に入るや，光男から鬼仙の伝統を直接に受けたことになる。それが光男が鬼仙を出る平成10年6月まで続いたのである。秀之の鬼瓦に対する意識が変わったのは鬼仙の倒産した平成11年9月である。倒産して直ぐに秀之は同じ月の9月に岩月鬼瓦を興している。さらに平成11年11月には久美と結婚している。文字通りの独立である。秀之はこう語っている。

食ってかないといけないんでねえ。やはり，自分の親がやってたんじゃなくて，自分がやり始めたことなんで。そこで，また意識が違います。止めればそこで止められた事だし。親に「継げ」って言われた訳じゃないけど，やってきて倒産って風になって，違う道もあったんですけどねえ。

秀之は平成11年9月以前は意識が現在とまるで違っていたという。

まあ，親にまだ食わして貰ってるっていうような。小遣いじゃないですけど，給料，貰

えればいいのかなーっていうような。まあ，俗に言う馬鹿息子みたいなもんですかねえ。二代目みたいな。そんなような意識でしたねえ。車乗り回して，飲み屋に行って，で何となく生活が出来ていたっていうようなねえ。

秀之は倒産する一年少しばかり前に叔父の光男が去って行ったことが今から思うと良かったという。それまではやはり，光男に精神的にも，実質的にも頼っていたからである。

辞められると，やはり作る人居ないとねえ。誰か作らないといけないから。うーん，そいでやはりやるようになるんですねえ。作れないとこの商売やっていけないんで。

やはり，どこでも，職人さんでエースがおらんようになれば誰かエースが育ってくると，やはり，上で，出来る人が居ると育たないっていう事ですかねえ。

秀之は光男が去って以降，「出来る」といった感覚を持ったという。

やはり，叔父さんが辞めてってからですかねえ。こう，自分で作れば，どんどん出来てく。毎日の積み重ねで，あれ，自分どんどん上手くなっていくなーっと，うーん，手が勝手に動くなーっていうふうで，何かそういうのはありましたね。作るたんびにこう，品物が良くなっていく。分かりますね，どんどん，こう，伸びて行くっていうのが。

それは，面白い感じ，面白いですねえ。やはり，どんどんどんどん手が動いて，叔父さんが作ってた様なものに近づいていくっていうのは。

光男が居た頃とは姿勢がまるで違っていることが分かる。

ウーン，こっちも，まあ，叔父さんのやれない雑用みたいな事をやっとればいいのかなーっていうのがあるもんですから。そうですねえ，ま，職人さん居れば，自分も社長業じゃないですけど，その方に進んでいけば，作るよりも売ること，そっちの売ることをメインにしていた方が良いというのがありましたからねえ，まだ。

つまり，販売，その他の雑用を主に働いており，その合間を見て，作っていたのである。ところが，光男の移籍が倒産より1年以上前に起こったので，倒産という非常事態に対して，実にうまく対処できたのであった。

その間（光男が去って倒産まで）にまた腕が伸びてたもんですから，やっていける自信があったもんですから。

お客さんもいましたしねえ。そのまま，お寺っていうのが残ってく以上，その仕事はあるもんですから。

まだ若いからっていう頭があって，歳いってたら，もうあと何年やれるかですけど，まだ何十年ってやれるから，今からまだやれるなーっと。

職人さんも少なくなるなーっと，そういう選択がありましたねえ。

秀之は自らの鬼瓦への読みと自信をもとに，岩月鬼瓦として独立したのである。秀之は確かに光男を通して，鬼仙の伝統を受け継いでいる。しかし，秀之は「もう，殆ど自分流ですねえ」と言っている。（第8図参照）

昔のそんな流儀とかそういうのは，継いで行くところは継いでいって，新しいところはどんどん変えていかないといけないなあっと。

自分流について秀之は次ぎの様に説明している。

雲の作り方でも，昔の職人さんみたいには上手くできないですからねえ。やはり，そんだけ修行してないしー。みっちり教えて貰ってるわけじゃあ無いので。まあ，歳いって

第8図
初代岩月鬼瓦　岩月秀之

る人から見たら「何じゃ，こりゃー」ちゅう様な感じだとは思うんですが。ま，どこが違って，ここが違ってるっていうのは，もう，殆ど違ってるんじゃあないですかねえ。

変化が起こったのは奥さんの久美であった。現在では特殊な鬼瓦以外では久美の方が仕事量は多いという。他の鬼屋でも奥さんが手伝うところは沢山あるが，手造りの鬼瓦を主人以上の量こなすのは無いのではないかと思う。

今ねえ，うちの嫁さんの方が多いですねえ。自分は社長業っちゅうか，外出たりねえ，色んな事やってるんで。自分より多いですねえ。まあ，殆ど弁当箱でいうと，ご飯の部分は全部嫁さんがやってる状態ですねえ。うちはああいう龍とか，込み入ったものを，細かいとこをやるぐらいなもので。

その久美がどんどんやり方を変えていったという。

嫁さんもまた，考え方が，生まれた時から，それを見てないんで，新しい考え方でどんどん来るんでー。自分が「こういう風にした方が良いよ」って言うのを，また嫁さん風に殆ど変えてしまったんで。だから，その，何十年って来た考え方が，うちの嫁さん入れたことが，作るようになってから，また，ガラッと変わりましたねえ。

秀之自身が久美という女性の鬼板師の存在を評価している。

いやー，多分珍しいと思いますよ。誰も多分見ても信じられないと思いますよ。

最初は独立してからやはり，自然に手伝うようになり，何気なく興味半分にやっていたという。それが事務仕事よりも作る仕事の方が向いていたのであった。すでに単なる補助ではなく，秀之が頼りにしている職人になっている。

殆ど全部最初から最後まで自分で作るんで，今は。基本さえ，基本はもう最初自分，厳しかったんで，ぼく，泣いて家に帰るくらい叩き込んだんで，最初は。遊びじゃなかったんで。こっちも生活掛かってたんで。

まあ，ガッツがあったのか，頑張って付いて来てくれたか，分からないんですけど，腕は良いですねえ。

秀之は鬼板師に向いているかいないかの分岐点を指摘する。

> 多分，作る喜びだけですねえ。出来たときの喜びですねえ。それが分かる人は，本当に向いているって言うか。作っても矢っ張り感動がないと，自分がとことんまでやって出来たものが，「あー，出来たーっ」て喜びが分かる人ならば，誰でも出来るんじゃないかなーって。

そして，その感覚を持っているか否かは，やはり，やってみないと分からないと言う。現在，岩月鬼瓦では2人の女性のパートを雇っている。秀之はこの感覚が掴めた人が伸びて行くし，長続きするという。掴めない人は単なる作業になって，早晩，辞めていくことになるのである。

鬼仙が分かれて，岩月鬼瓦と三州鬼仙になって現在に至っているが，実態は，兄弟による二人三脚のような形になっている。三州鬼仙は製造部門で，岩月鬼瓦からの外注を受けて製造し，岩月鬼瓦に納めている。一方，岩月鬼瓦は自社で製造もしながら，販売の母体になっているのである。

岩月仙太郎によって始まった「鬼仙」は五代目，岩月清の代で，平成11年9月6日に破産し，実質上無くなった。しかし，その鬼仙が，今，岩月鬼瓦，三州鬼仙として復活している。その様は鬼仙という伝統の「死と再生」，「破壊と創造」の神話劇を現代に見るような気さえしてくる。負債という重い鎖で身動きがとれなくなった鬼仙は，自らの死を潜り抜けることによって鎖から放たれ，新しい鬼仙へと蘇らんとしてる。

参考文献

石田高子　1983年『甍のうた』愛知県陶器瓦工業組合.
駒井鋼之助　1963年『粘土瓦読本』彰国社.
三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合　2000年『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州白地製造組合.
吹田市立博物館　1997年『達磨窯』吹田市立博物館.
杉浦茂春編　1982年『高浜市誌資料(六)』高浜市.
高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会編　2003年『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』高浜市伝統文化伝承推進実行委員会.
高原　隆　2002年「鬼師の世界―三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号：227–247.
――　2003年「鬼師の世界―黒地：山本吉兵衛(1)―」『文明21』第10号：163–189.
――　2003年「鬼師の世界―黒地：山本吉兵衛(2)―」『文明21』第11号：81–132.
――　2004年「鬼師の世界―黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(1)―」『文明21』第12号：113–165.
山下晋司，船曳健夫編　1998年『文化人類学キーワード』有斐閣.
ONIX　1992年『鬼瓦総合カタログ』ONIX.